



軽音部の部室である第二音楽室に軽音部の部員は全員集まっていた。目線の先にはばらばらに紙が散らばっていた。

そこに描かれていたのが部員である原山海と浜田清太と思われる男子2人の恋愛模様。



原山海「これは一体なんなんだ？まさか…俺と清太？」


浜田清太「そう見えるよね。いったい誰が描いたんだろう？部員以外の人かな？」



山瀬浩樹「部室内にあるってことは部員じゃないのか？」


中谷夢「確かにそうかもね。さっさと片付けて練習しない？」

石山晴夏「さすがに誰がやったのかをはっきりさせた方がいいんじゃないかな？破られているのも気になるし。」




浜田清太「先生に言う話でもない気もするから、とりあえず僕たちで話し合おう。何か理由があったのかもしれないし。」

原山海「え、こんなの許していいの？プライバシーの侵害だよ。」




山瀬浩樹「とりあえず、やったやつが本当のことを言うつもりなさそうだし、話し合おうか？それこそ……。」

『メッセージが届きました。』




石山晴夏のスマホが鳴った。彼女がスマホを覗くと届いたメッセージを読み上げた。

石山晴夏「好きだって伝えることはこんなに難しいのに、相手に受け取ってもらうことはもっと難しい……。」




中谷夢「なにそれ？誰から届いたの？」

石山晴夏「ボトルシップだよ。ランダムで届く設定にしてるの。ボトルシップから何か情報調べられないかな？」




山瀬浩樹「どうだろうな？そもそも誰が送ったか分からないのに、どうやって調べるんだよ。」


原山海「確か、送信場所の範囲を狭めることができた気がするよ。設定からこうしてこうすれば……。」




スマホを取り出し、ボトルシップを開いて設定を変更する。すると、第二音楽室周辺に変更することができた。



浜田清太「あと、こうすれば30分に3通受け取れる設定にできるよ。匿名だから良いところあるけど、仕方ないよね？まあ解決したらアカウント作りなおせばいいか。」



中谷夢「それでいいんじゃない。それに範囲はこの辺だけど部員以外のも届くかもしれないし、すぐに決めつけるのはよくないかもね。」



そうやって、みんなは話すことになった。誰がこの本を書いたのか？誰が破いたのか？はたまたこれは本当のことかどうか？

結論は一体どこにあるのだろうか？

